

グリルパルツァーの戯曲 『アルゴ号遠征隊』について

牧 秀 明

1. 序 論

グリルパルツァーの戯曲『アルゴ号遠征隊』は、実際は彼の3部作の詩劇『金羊毛皮』の第2部に相当している。

この『金羊毛皮』は、第1部は『賓客』、第3部は『メデア』と題されており、3部作全体でひとつの統一体を形成しているが、各部を貫く共通の糸は、主要人物であるコルクスの女魔術師メデアと、登場人物たちが争奪の対象としている金羊毛皮だけであり、各部で展開される事件や時代はそれぞれ異なっている。

第1部『賓客』は、ギリシャ人フリュクススがコルクスに金羊毛皮を持ち来たり、それをコルクス王アイエテスが所有欲に駆られて奪おうとする結果、ついにはそのフリュクススを殺害するにいたる事件が述べられている。メデアは両者の調停の役を担っているが、自分が意図したわけではないその殺害に加担したことを知り絶望に襲われる。

第2部の『アルゴ号遠征隊』は、第1部の事件を知ったギリシャ人が、ヤーゾンを隊長として、アルゴ号という船に乗ってコルクスに上陸し、金羊毛皮を奪還する事件が扱われている。そして、その事件に絡んで描出されるヤーゾンとメデアとの恋愛が、この劇では極めて重要なテーマになっている。

第3部『メデア』では、舞台の場所はギリシャのコリントに移されている。

この劇では、ヤーゾンと結婚したメデアが、異邦人であるがゆえに味わう社会的疎外、保身と出世への願望から彼女の追放を画策するヤーゾンとの確執、そしてメデア自身の苦悩と絶望が中心主題になっている。メデアは、結局ヤーゾンへの復讐のために自分の子供たちを殺害し、彼女の不幸な運命の元凶ともみなせる金羊毛皮を持ってアポロン神殿のあるデルフィへ向かうところで、この3部作詩劇は終わっている。

グリルパルツァーは、本来の戯曲について、「演劇は現在であり、筋に属するあらゆるものを、うちに含まなければならない」と述べて、3部作戯曲は「形式として誤っている」と断じているが、この壮大な題材を表現するにはやむをえず3部作にすることに譲歩するしかなかったと述懐している¹⁾。

しかし、この3部作戯曲は、以上のようにそれぞれが異なった時期、異なった事件を中心に据えていて、それなりの自律性・独立性を有しているから、各部を個別に論じることもそれなりの意義があろう。それを踏まえてこそ、この重層的な3部作全体を貫く重要な問題性を考察し、その核心的テーマに一層深く肉薄することが可能になるだろう。

以上の観点から、本論では、第2部の『アルゴ号遠征隊』を論述したい²⁾。

2. グリルパルツァーの3部作詩劇『金羊毛皮』の成立に関連して

(1) 『金羊毛皮』の執筆契機とその中断

作品の成立に関しては、3部作全体にわたって展望してみたい³⁾。

グリルパルツァーは、前作『サッフォー』の大成功に励まされて、この『金羊毛皮』という壮大な戯曲に取りかかる。すでにメデアという題材には関心を持ち、ギリシャ悲劇も読んでいたが、執筆の直接の契機になったのは、B.ヘーデリッヒの『神話事典』に遭遇したからである。

1818年6月、彼は、生まれつき弱い健康を著しく害し、同じく病弱だった母親とともにバーデンに湯治に行く。彼が宿泊する部屋は、女主人の大学生の息子が住んでいたところで、彼の荷物はまだ届いていなかったから、その息子が

部屋に残っていた豚革装丁の本をさりげなく手にとった。それがヘーデリッヒの『神話事典』であった。彼は頁をめくりながら「メディアの項目」に眼をやった。彼はこのときのことを以下のように記している。

私は、この悪評高い魔女の物語を非常によく知っていたが、しかし私は、個々の事件をこんなに身近にいちどきに見たことは今までなかった。私の以前の題材のときと同じように、突然私の中に、この膨大な、実際これまで詩人が扱った中でも最もすばらしい題材が構成されたのである⁴⁾。

だが彼は、この膨大な題材を眼前にして創作の困難を感じる。3部作にするしかないが、それは劇の本質に反するという疑念、執筆には長期的な集中力が必要だが、自分の「悟性」と「想像性」との間の分裂的性格にそれが耐えられるかという心配、自分の文学的才能に対する迷い、そして悪化している健康状態という障害があった。

だが、次に赴いたガスタインへの湯治で予想外に健康を回復し、ウィーンへ帰ってから資料研究を継続し、1818年9月29日から10月5日の間に第1部の『賓客』が出来上がる。さらには10月20日から11月2日には、第2部の『アルゴ号遠征隊』の最初の2幕が成立する。しかし、第3幕でのメディアとヤーゾンとの恋愛関係の叙述に困難を認めて執筆が滞り、この場面の様々な試行錯誤の最中の翌年1月に、予期しなかった事件が突発する。彼はその打撃に打ちのめされ、この『アルゴ号遠征隊』を完成するまでに長期の中断を余儀なくされることになる。

この予期しなかった事件というのは、1819年1月23日の母親の死である。グリルパルツァーは『自伝』で、この時の死の状況を、長期の療養生活で死を覚悟した母親が、夜中に聖餐式のために教会に行くことを思い立ち、着替えをしようとしている際に発作に襲われ、「背は壁に凭れ膝は寝室机に支えられて、死んでもまっすぐ立っていた」⁵⁾と述べている。しかし「コメンタール」の著者は、この母親の死を「自殺」としている⁶⁾。恐らくグリルパルツァーは、

『自伝』を公表するに当たって、世間への体面と母親の名誉を慮って、実際の自殺を突然の発作による自然死に敢えて書き変えたと解することもできよう。だが、グリルパルツァー自身はそのときは自殺と判断できず、そのとき直面した痛ましい現状を印象のままに記述しているともみなせる。母親の死の状況のグロテスクさは、あながち捏造とはいえない迫真性をもって読者に刻印されるからである。

彼は、この突発事件で受けた極度の精神的打撃から解放され、その苦痛な想い出を払拭するために、イタリア旅行を企てる。彼は、1819年3月24日にウィーンを出立し、トリエステ、ヴェネチア、ローマ、ナポリを訪れ、同年7月中旬にウィーンに帰っている。

彼はこの旅行で悲喜こもごもの様々な体験をする。このイタリア旅行は、戯曲の執筆から彼を遠ざける結果になっているが、グリルパルツァーの社会的状況や政治的関係の様相が如実に現われているし、彼の当時の時代的背景が看取できるので、その経過と実情について言及してみたい。

(2) イタリア旅行 (1819年3月～7月)

彼は当時宮廷財務局の官吏の職についていた。彼は、出発時の手続きの煩雑さに辟易し、トリエステとヴェネチア間を粗末な荷物運搬船で航行したときは船酔いし、ローマに至るアペニン山脈通過の際に寒気を感じながらも、途中で健康を無視して美味なワインを飲み、ローマに着いたら人々の雑踏にもまれて吐き気を催したと書いている。それにもかかわらず彼は、ヴェネチアには魅力を感じ、ローマでは朝から晩まで徒歩で貴重な文化財に接することの喜びを味わっている。しかしそれまでの旅行の無理とこの観光の強行がたたってか、ローマでマラリアに罹患する。ローマ人医師の治療は効果がなく、メッテルニッヒ侯お抱えのドイツ人医者の方によってこの熱病から快癒する。

彼はさらに、皇妃の執事長であるヴルムブラント伯爵と馬車でナポリへ行く。グリルパルツァーは、ヴルムブラントが好意的に誘って馬車に同乗させ、ナポリで彼の館に宿泊させたのは、自分の実務能力を当てにして、皇妃の会計整理の手伝いをさせる底意があったからだろうと推測している。しかしまた彼

は、ヴルムブランドは自分を皇妃に近づけ、皇妃の愛顧を得させるためでもあったと善意にも解釈している。そしてそのせいか、いつの間にかグリルパルツァーは皇妃の秘書になったとの噂が広まっていく。

彼は、メッテルニツヒ侯からも好意を示され、その晩餐会に招待されたりしている。

このナポリ滞在中に、グリルパルツァーの職業経歴と戯曲執筆に障害となる事件が起こる。彼の世話を引き受けていたヴルムブランドが、イギリス旗艦を訪れている最中に、誤って下の船倉に落下して重傷を負ったのである。彼は病床につき、賜暇の期限が切れつつあったグリルパルツァーに、異国での知人のなさを理由にしばらく話し相手としてナポリに残ってくれるよう依頼する。グリルパルツァーは、帰国したら昇進が約束されていて休暇期間を延ばすことはできなかったが、恩義を感じていた彼は、ヴルムブランドの懇願を拒むことに気が引け、皇帝が賜暇延期の許可を役所に通達するという条件で承諾する。だが、実際はこの皇帝の通達状は宮廷財務局には届かず、結果的には、戯曲執筆の再開が遅れ、また切望していた昇進のチャンスを失うことになるのである。

(3) 『金羊毛皮』の執筆再開と様々な事件

グリルパルツァーがウィーンに帰着すると、彼が皇妃の秘書になったという噂が広まっており、また彼が許可なく休暇期間を延長したことが問題視され、期待していた昇進が見送られる。その後さらに2度この昇進の可能性が出てくるが、上司の縁故関係の優先等でそれも叶わず、不満を抱いた彼は役職を辞する決心をする。しかし彼を愛顧していた財務大臣シュターディオンがそれを諫め、その代わりに無期限の賜暇を提供する。グリルパルツァーはそれを利用して、改めて懸案中の戯曲『金羊毛皮』の執筆を開始する。

だが彼はそれが全くできないことを思い知らされる。当初企画していた作品の構想を完全に忘却してしまっていたのだ。原因は、母親の不幸な死と、その後の長期のイタリア旅行に帰せられる。彼は『自伝』で次のようにその状況を伝えている。

当時私は、財務大臣から頂いた休暇を、できるだけ、イタリア旅行によって中断された金羊毛皮の完成に利用しようとした。しかし悲しい事態が生じた。私の母の死の際の心の動揺、イタリアでの強烈な旅の印象、そこでの私の病気、帰るときの様々な不快事などによって、私がこの仕事のために準備し、あらかじめ考えていたことが、すべて全く拭い去られていたのだ。私は全部忘れていた。とりわけ立脚点を、しかしまた個々の点をすべて完全な暗闇がおおっていた⁷⁾。

彼がこの忘却の闇の中で記憶を空しく辿っていた折に、ある偶然の出来事が契機となって当初の構想全体が甦り、彼を苦境から救うことになる。彼はその経緯を『自伝』の中で次のように記述している。

私はつい最近、母と一緒にしばしば、ピアノ用に編曲された大作曲家の曲を連弾で演奏していた。ハイドン、モーツァルト、ベートーベンのこうしたすべてのシンフォニーの際に、私は絶えず私の金羊毛皮のことを考えていて、その思想の胚種は音楽と溶け合って区別できない全体になっていた。……ところで私は、もうずっと以前に女流作家のカロリーネ・ピヒラーと知り合い、今も交流を続けていた。彼女の娘は立派なピアノ演奏家であり、食後私たちは時々その楽器に坐って連弾をした。すると、私たちが、私が母と演奏したあのシンフォニーにさしかかったとき、私がああ最初の演奏の際に半ば無意識的に注ぎ込んだ思想のすべてが、また私に蘇ったのだ。私は、突然再び自分が望んでいたものを知った、そして、たとえその思想の本来的で簡明明白な立脚点をもはや純粹に獲得することはできなかつたとしても、全体の意図と行程は明確になった。私は仕事にかかり、アルゴ号遠征隊を完成し、メデアにむかった⁸⁾。

こうして『金羊毛皮』の第2部『アルゴ号遠征隊』は、1819年7月から11月に完成し、第3部の『メデア』の執筆は、同年11月8日に開始される。

だが、またもやイタリア旅行の不吉な暗雲が彼を襲い、執筆継続を延伸させることになる。それは「カンポ・ヴァッチノ事件」と称されているものである。

彼は、ローマ滞在中に感銘を受けた古代遺跡に関して詩を書いていた。それは『カンポ・ヴァッチノの廃墟にて』と題された詩であり、J. ミュラーによれば、「以前のシラーの『ギリシャの神々』と同じように、古代ギリシャの精神を賛美し、その没落はキリスト教時代の台頭のときであると嘆いた」ものである。そしてこの詩は、検閲官で彼の友人であったシュライフォーゲルの検閲を問題なく通過し、ウィーンの出版社の年報『アグラヤー』に上梓されて刊行された。しかしこれが文学騒動を惹き起こした。その原因は、出版社主がこの年報を、悪気はなく軽い気持ちでバイエルン皇太子の妃に献呈したことにある。それを厳格なカトリック教徒であった皇太子が読んで立腹し、ウィーン宮廷に苦情を申し込んだのだ。これを知ったウィーンの教会派は憤激し、グリルパルツァーを告訴する。さらには皇帝は、自分の愛顧に対する忘恩とみなして彼に背を向け、好意的であったメッテルニッヒも彼を非難するに至る。これに乗じた宮廷や政府のグループは、グリルパルツァーに対する積年の妬みや嫌悪の鬱憤晴らしの好機とみて、彼を「メッテルニッヒ体制の危険な反対者」との烙印を押して攻撃し、彼は、人々から「不信の眼」で見られる苦痛を味わう。J. ミュラーは、この事件を、「彼の超過した休暇の正当性に対して張り巡らされた陰謀」と呼んでいる。

この事件によって、グリルパルツァーの詩は年報から削除され、出版社は新たな製本作業で多額の損害を蒙る。だがすでに400部は外国に流入しており、グリルパルツァーは、「禁じられた文書やスキャンダルそのものの愛好家」は、外国に出回っていたこの年報を取り寄せ、そこから彼の詩を書き写したと伝えている。彼は、「私の作品のどれも、この詩ほど、我が祖国で普及したものはなかった」と、皮肉を交えて述懐している⁹⁾。

この事件は、グリルパルツァーが警察庁長官への釈明書を提出し、最後は彼への厳しい譴責処分で終結する。そして財務大臣のシュターディオン伯爵は、

彼を財務省に転勤させ、自分の官房室に入れてそれまでより高い給料の地位につけ、そのことによってグリルパルツァーの不満を宥めることになる。

こうしてグリルパルツァーは、12月21日に『メデア』の執筆に再度専心し、1820年1月27日に脱稿し、彼が企図した3部作の『金羊毛皮』の全体が完成するのである。

3. 『アルゴ号遠征隊』：作品概要

この戯曲の舞台は、ギリシャから見たら辺境の地にある黒海沿岸のコルクスである。そして劇そのものは、ヤーゾンを隊長とするギリシャ人一隊が、コルクス王アイエテスに奪われた金羊毛皮を奪還するために、アルゴ号という船でコルクスに到着したところから始まる。

第1幕。場所は、「岩や樹木のある荒地」で、背景に「半壊の塔」が見え、さらにその後ろには「海への眺望」が設定されている。その塔の最上階からは「弱い光」が漏れていて、そこに女主人公のメデアが隠遁生活を送っているのである¹⁰⁾。

メデアは、第1部『賓客』の最後の場面で、父親であるコルクス王が、庇護を求めてやってきたギリシャ人フリュクススを殺害し、彼から財宝と金羊毛皮を奪ったことから、絶望に駆られ、復讐の女神たちの幻覚に襲われて逃走していた。今彼女は、この塔にひとり孤独に悲嘆の日々を送っている。彼女は、父親の命令でフリュクススから剣を貰い受けて我知らず父親の犯罪に加担したこともあり、自らの罪の意識に悩まされ、さらには父親の残虐行為も容認できないでいるから、父親世界からも身を隠しているのである。

そこへ当のコルクス王アイエテスが、息子のアプジュルトゥスを連れて登場する。メデアの協力を頼みに来たのである。なぜならアイエテスは、ギリシャ人たちがコルクスに上陸したという報知を受け、ギリシャ人たちの来訪の理由が、自分が殺害したフリュクススの復讐にあると悟っているからである。特に彼は、戦闘になれば敗北し、殺され、逆に金羊毛皮のみならずコルクスの財産

もすべて略奪されるのではないかと恐れている。だから彼は、魔術を駆使する娘メデアの援助が是非とも必要なのである。

呼ばれて出て来たメデアは、父王の犯罪と略奪を再度非難するが、彼の懇請に負けて結局は協力を応諾する。そして魔術の祭儀を執り行うために皆と一緒に再び塔に去る。

彼女たちが退場したあと、ギリシャ人の領袖であるヤーゾンとその友人ミロが舞台に出て来る。彼らは、コルクスに到着したが、航海中の難儀にあって食料が欠乏し、今仲間のためにその食料を探し回っているのだ。するとヤーゾンは、かの塔から灯りが漏れているのに気づき、危険を予感したミロの制止を振り切って、彼だけが塔に赴くべく単身で敢然と海に飛びこむ。

場面は変わって、塔内のメデアの部屋である。祭司の装いをしたメデアは、神々に異様な祈願の儀式を行うが、そこの神像の後ろに潜んでいたヤーゾンは、この魔女の儀式に不吉な災厄を察し、それを止めさせるべく飛び出して相手に斬りつける。しかしヤーゾンは、自分が傷つけた当人が女性であると知り、しかも彼女が魔性のものであると同時に美しい姿をしていることを認め、彼女に複雑な恋心を抱きながらその手にキスをする。これがヤーゾンとメデアとの最初の出会である。

すると、そこでの騒動を聞きつけた弟のアプジュルトゥスが、コルクス兵士たちと踏み込んで来て、不法侵入者のヤーゾンを攻撃する。しかしメデアが間に入って弟を引きとめ、そのお陰でヤーゾンは辛くも難を免れ、メデアに再会の告知をして、海へ飛び込んで逃走する。

第2幕。舞台は、「前幕の終わりのときのような広間」で、時は「朝」である(A249)。メデアの乳母と侍女のペリッタたちがいる。ペリッタは、以前恋人との秘密の逢瀬をメデアになじられ、メデアから近づくことを禁止されていたが、今はギリシャ人に家を焼かれ、夫が捕われの身となったから、メデアに救助を求めてやって来たのである。また別の侍女は、メデアの愛馬が逃げ出したことを報告し、自分の落ち度を責めてメデアが持ち前の怒りを爆発させるのではないかと心配している。そこにメデアが登場する。

しかしメデアは、メリッタに同情の言葉をかけ、愛馬を失ったことには全く関心を示さない。彼女は、ヤーゾンと出会ったことによって以前とは変化しているのだ。

メデアは、放心状態で、「喜びに輝く眼差しで」、ゴーラに向かって昨夜の侵入者のことを「神」、しかも「死の神ハイムダー」と呼ぶ。しかしその事件に居合わせていたゴーラは、彼は幻想ではなく「人間だったのです、高慢で厚かましい男だったのです」と反論する(A252f)。幻想で自分を守ろうとしたメデアは、ゴーラに現実を突きつけられ、突然怒りを爆発させてゴーラに沈黙を命じる。このことによってメデアは、激情に駆られやすい情緒的女性であることが看取できる。

そこへ父親のアイエテスと弟のアプジュルトゥスが登場する。父親は昨夜メデアが敵を庇った振舞いを難詰するが、アプジュルトゥスは、姉は動転していたからだと弁護する。アイエテスは、ギリシャ人上陸の事実を告げ、自分の反撃計画を漏らす。彼は策略を用いて、ギリシャ人が会談を申し入れてきたから表面上はそれに応諾し、その間兵を集めて軍備を整え、最後には騙し討ちにしてギリシャ人を殲滅するという。そのためには、どうしてもメデアの秘薬が必要だと付け加える。

メデアは、ここで初めてギリシャ人到着を知り、あの侵入者がギリシャ人であったことを認識する。そしてメデアは、父親に従順の意を表し、ギリシャ人打倒に加担することを受け入れる。

場所は変わって、「樹木のある空き地」で、「舞台背景の左には王の天幕」が設置されている(A257)。ギリシャ人の代表たちが、隊長であるヤーゾンがまだ帰還していないので、今後の善後策を協議している。自分たちだけで戦闘をしかけて航海の目的である金羊毛皮を奪還するか、それともコルクス王と和睦して無事帰国の途につくかで議論は分かれている。しかし指導者を失った今、金羊毛皮を得る意味がなくなっており、またその宝を守護している恐ろしい大蛇の噂に恐怖を煽られ、結局後者の方に意見の一致を見る。そこへヤーゾンとミロが帰って来る。ヤーゾンは、彼らが撤退の方策を講じていたことを察し、

それが恐怖からであったことを見抜いて、彼らの臆病を非難し軽蔑する。ここには、隊長としてのヤーゾンの勇猛果敢な性格が見て取れる。

そこへコルクス王アイエテスが兵士たちを従えて登場する。ヤーゾンとアイエテスは互いに敬意を要求する。そしてヤーゾンは、コルクスに遠征してきた理由を述べる。彼は、自分はギリシャの高貴の出であり、羊毛皮の所持者であったフリュクスとは「親戚関係」にあり、その羊毛皮は本来ギリシャに由来しギリシャの「栄光と至福の貴い証し」であると述べて(A262)、その返還を要求する。アイエテスは、最初は羊毛皮は持っていないと言うが、ふとしたはずみで所有していることを暴露してしまう。ヤーゾンがアイエテスの虚偽に怒り、脅しをかけると、コルクス王は彼を宥め、話し合いのために館での饗宴に招待したいと申し入れる。これは勿論彼の策略で、その歓待の際にメデアに頼んでいた眠り薬を飲ませ、それに乗じてギリシャ人たちを征討するつもりなのだ。

そこにヴェールをかぶったメデアが、秘薬の盃を持って登場する。アイエテスはその盃を受け取るとすぐに、ヤーゾンに歓迎の言葉を添えて飲むよう勧める。ヤーゾンは、これがコルクス王の卑劣な策略であることを察知して飲むことを拒否する。メデアは、そのヤーゾンの声を聞いて驚き、後ずさりする。父親がメデアに早く飲ませよう督促すると、ヤーゾンはそのヴェールをかぶった人物の衣装を認め、昨夜初めて会った女性だと気づく。そこで彼は、彼女が自分を逃がしてくれたことを思い出して信頼を託し、その飲物を飲もうとする。するとメデアは突然、「やめて!」「飲めば破滅よ!」と叫ぶ(A265)。ヤーゾンは、ここでまたメデアに救われるのである。ヤーゾンがメデアのヴェールを剥ぎ取ると、父親のアイエテスはことが露見することを恐れて「メデアよ、去れ!」(A265)と命じる。ヤーゾンはここで初めてメデアの名を知り、彼女の手をつかんで自分の方に引き寄せようとするが、彼女は身をもぎはなしてそこから逃げ出す。ヤーゾンが彼女の後を追おうとし、アイエテスが邪魔して彼の路を塞いでいるところでこの幕は終わる。

第3幕。舞台にはコルクス王の天幕があり、その中にメデアと侍女たちがい

る。その後ろや横には、王が配置したコルクス兵たちが潜んでいる。そこにヤーゾンがメデアを追いかけて来ながら舞台上に登場する。

ヤーゾンはどうしてもメデアと会いたがるが、アイエテスがそれを阻止して、天幕の外で互いに争っている。ここに、グリルパルツァーの作劇術の妙が窺い知れる。つまりここでは、舞台上の2重構造が呈示されている。外でヤーゾンが争いながら「僕が呼んでいるんだ！愛しているんだ、メデア！」と叫ぶと、天幕の中のメデアは無言のまま「手で眼をおおう」仕草をする。これによって乳母のゴーラは、彼女の心の動揺と不安を認め、彼女が愛の悩みに苦しんでいるのを確信するが、観客も、この外と内との対比によって、メデアの秘められた心理の彩を読み取るのだ(A268)。

ヤーゾンとアイエテスは押し問答の末、ついには剣を抜き放って戦うことになるが、コルクス兵たちが出動してヤーゾンたちは劣勢を強いられ、逃走を余儀なくされる。

メデアは、天幕に入ってきた父親に、意外にも激しい口調でギリシャ人討伐の提案をする。父親のアイエテスは、彼女がギリシャ人を助けながら殺害を要求することに理解が及ばない。しかし彼が、女性戦士でもあるメデアにもその攻撃に加わることを要請すると、メデアは断固としてそれを拒む。アイエテスは、彼女が実際に戦闘を避けようとしているのはヤーゾンのせいだろうと揶揄する。するとメデアは、今まで寡黙であった態度を急変させて、自分の現在の愛に対する考えを長々と語り、そのアンビヴァレントな苦悩の裡を開陳する。アイエテスは、彼女の心の混乱に同情し、弟のアプジュルトゥスに、羊毛皮が保管されている洞窟へ連れて行くよう命じる。しかしメデアは、そこは「わたしたちの犯罪の場所」であり、羊毛皮は「復讐の光」を発し「災禍」をもたらすと言って拒むが、アイエテスは、そこが国中で一番安全なところであり、その宝を守るには「お前の魔術が、お前の呪文が必要なんだ」といって説得し、メデアに承知させる(A272)。

舞台は変わってギリシャ人たちの潜伏所である。友人のミロは、ヤーゾンが異国の魔女を愛していることを知って驚くが、ヤーゾンは自分の本心を打ち明

け、彼女は自分を2度も助けてくれて感謝しているし、彼女の美しさ、優しさ、そして「黒い眼をしたすばらしい女性」であることに感銘を受けはしているが、自分たちの究極の目的は羊毛皮を奪還して、故国での約束を遂行することであると伝える(A274)。

そこへ、アプジュルトゥスとメデアたちが登場してくる。彼らは、嵐によって橋が崩壊し、やむなくこの道を通らざるを得なかったのだが、ここでメデアはヤーゾンと3回目の出会いを経験する。アプジュルトゥスたちは数に勝るギリシャ人たちに攻撃されて押し戻され、メデアだけがヤーゾンに強引に捕まえられてひとり残る。ここでヤーゾンは、メデアに遭遇してからの自分の心境を打ち明け、次のようなギリシャ人の信仰を語る。

神々はかつてすべての存在を／二重にお創りになり、それから分割されたのだ、／だからその半身は他の半身を求めて／海や陸を探し回り、お互いを見出すと／魂はふたりを結びつけ、融合して／ついにはひとつになるのです！
(A278)

メデアは、ヤーゾンの長い心境告白とこのギリシャ人の信仰物語を終始無言のまま聞いていたが、突然去ろうとする。ヤーゾンは彼女を無理に引きとめ、最初の出会の時のキスを想起させ、彼女が今まで知らず、また今も認めようとしない心内の愛情を自覚させようとして、執拗に「わたしはあなたを愛しています」と敢えて言葉で言わせようとする(A281)。しかし彼女は頑として沈黙を守り続ける。とうとうヤーゾンは、言葉を一言も喋らないメデアに嫌気がさし、ついにはメデアを冷たくはねつけてしまう。

そこへ再び隊伍を整えたコルクス王たちが登場し、ヤーゾンは彼に娘を引き渡して宣戦布告をする。メデアは、ヤーゾンから最後の別れの言葉を受けると涙を流し、去っていく彼の背後から「顔を彼の方に向けて腕を伸ばしながら」、絶望とも哀訴ともとれる声で「ヤーゾン！」と叫ぶ。それに鼓舞されたヤーゾンは、またメデアを取り戻そうとして、「このひとは僕の妻だ！」と公言す

る。その言葉を聞いた父親のアイエテスは、メデアの変節と隠されていた策謀を看取し、ヤーゾンに攻撃をしかけようとする。そのとき初めてメデアははっきりと、「お父様、あのひとを殺さないで！わたしはあのひとを愛しているんです！」と告げる(A283)。アイエテスは、ここで娘の欺瞞と裏切りを確信し、メデアに向かって次のような呪いの言葉を浴びせかける。

お前はわしを騙し、裏切った。／ここに残れ！もうわしの館に足を踏み入れるな。／お前は追放だ、荒野の獣のように、／異国で死ぬんだ、見捨てられ、たったひとりでな。／あの情夫について、あいつの故国へ行くんだ、／あいつと床を共にし、あいつの迷妄と汚辱を共にするんだ、／異国で、異国の女として生き、／嘲られ、軽蔑され、罵られ、嘲笑されるんだ、／あいつ自身は、お前は彼のために父や祖国を捨てたのに、／お前を軽蔑し、お前を嘲弄するだろう、／欲望が消え、衝動が収まったらな。／そしたらお前は立ち尽くして手をよじり、／それを祖国へ差し伸べるだろうが、／祖国は広漠とした怒涛の海に隔てられ、／その波はお前に呟きながら父の呪いを送るのだ。(A285)

ここには、父親の娘に対する怒りと復讐の念がこめられている。この愛する父親の追放と呪詛の言葉を聞いたメデアは、不安と恐怖におののくが、しかし彼らが去るのを見送るしかない。

ヤーゾンはメデアを得た喜びに勢いづけられて、本来の目的であった金羊毛皮の奪還を決意し、メデアにその保管場所を尋ねる。メデアは、羊毛皮が災厄の元凶であってそれが彼にも及ぶことを断言し、その保管場所の恐ろしい情景を描写することによってヤーゾンに恐怖を呼び起こし、その入手不可能性を強調してヤーゾンの決心を鈍らせようとする。

いいこと、あなたは死ぬのよ。／あれは洞窟の中に保管されてるわ、／策略と暴力の／あらゆる恐怖に守られて。／迷宮の通路があり、／感覚を混乱さ

せ、／奈落は欺くように覆い隠され、／足下には短剣が、／吸い込む大気には死神が、／様々な姿をした殺人鬼が待ち構え、／そしてあの羊毛皮は、樹木に掛けられているの、／毒を塗られ、／大蛇に守護され、／それは眠ることもなく、／容赦することもなく、／近づくこともできはしないのよ。
(A287f)

しかしヤーゾンには、羊毛皮奪還という故国での約束を果たすことが自分の大儀だと高言し、勇者としての自分の名誉を賭けて敢然と目的を遂行しようとする。決心を翻そうとはしない彼を見て、メデアは、「住む家がひとつなら、体もひとつ、破滅も一緒よ！」(A288)と運命を共にする覚悟を決め、みづから案内役を申し出て、ヤーゾンと共に洞窟へ向かう。ここで第3幕の幕が降りる。

第4幕。舞台は地下の「洞窟の内部」で、「背景の岩壁には大きな閉じた門」がある(A290)。その中に金羊毛皮が保管されているのである。

この第4幕の舞台設定は、第1幕の塔の場面とは対照的である。高く聳える塔と地下の暗い洞窟。メデアは、以前はひとり孤独に隠棲していたが、今は恋人ヤーゾンとともにいる。これをメデアが幸福を獲得した表徴と捉えることもできようが、それはまやかしである。彼女が塔に閉じこもったのは、父親の犯罪から身を離すためであり、そこには彼女の自由意志が働いている。彼女は、自分のアイデンティティを守ろうとしたのである。しかしこの洞窟の場ではメデアは、恋人ヤーゾンの意志に従い、羊毛皮の略奪というコルキスに対する犯罪に加担している。彼女は、ヤーゾンの傀儡として自由を放擲し、自分のアイデンティティを喪失している。塔から地下への下降は、彼女の頹落を示唆している。

メデアとヤーゾンがこの地下に降りてくるが、再度メデアは、自分の不安と死の心配を理由にヤーゾンに思いとどまるよう懇請する。それを聞き入れようともしない彼に、今度は彼の剣を奪ってその切っ先を自分の胸に向け、自害の素振りを見せて脅しをかけるが、ヤーゾンはそれでも自分の目的を放棄しようとはしない。最後の手段として、彼女は彼にキスを浴びせて愛に訴えるが、そ

れも効果がない。そこでメデアは、自分の願いが空しいことを知り、持ってきた眠薬の入った盃を彼に渡し、門の中に入ったらそれを置いて遠く身を隠すよう助言する。ヤーゾンは言われた通りにし、ついには守護していた大蛇を眠らせ、その間に羊毛皮を奪うことに成功する。こうしてふたりは洞窟を後にする。

場所は変わって、「洞窟の前の空き地」となる。舞台は、「背景には海の眺望、その右側は岸にある丘に隠れ、その丘の背後には、アルゴー号遠征隊の船が、マストと前部だけを見せて停泊している」という設定である。そこでギリシャ人たちは、乗船の準備をしながらヤーゾンの帰還を待っている。メデアの乳母ゴーラがふたりのギリシャ人に捕縛されて登場するが、メデアの異国ギリシャでの話し相手として船に連れ去られる。

友人のミロがまだ帰ってこないヤーゾンを案じていると、地面の落とし戸が開いてメデアが上がって来、その後からヤーゾンが、羊毛皮を旗にして姿を現わす。ミロはヤーゾンの無事の帰還と羊毛皮奪取を喜び、船での逃走を急がせる。そこにメデアの弟のアプジュルトゥスがコルクス兵を引き具して登場する。

アプジュルトゥスはヤーゾンに姉のメデアの返還を要求する。メデアは、ヤーゾンと弟への情愛との板ばさみになって呻吟するが、アプジュルトゥスは、メデアと父親との仲介に立ってその赦しを請い、自分の懇願が彼の気持ちをすでに半ば和らげたことを伝える。彼はその理由として、「まだ何も起こったわけではありません、異国人たちは、まだ羊毛皮を見つけてはいません」と言う(A301)。するとヤーゾンは勝ち誇って羊毛皮を高く振り上げ、それが自分の手元にあることを明示する。アプジュルトゥスは、メデアの秘薬の助けによってすでに羊毛皮が奪われていることを知り、彼女を裏切り者とみなし、「不幸に落ちて破滅するがいい！」と呪いの言葉を浴びせる(A301)。そして彼は、メデアをヤーゾンに譲り渡す代わりに羊毛皮を返還するよう提案する。しかしヤーゾンは、メデアを受け取る代わりにお前の命を免除してやると言う。アプジュルトゥスは飽くまで羊毛皮を取り返そうとしてヤーゾンに迫るが、逆

に一撃を加えられて、兜と楯と剣を払い落とされ、傷は受けないがよろめいて倒れる。そこへミロが、コルクス王が軍勢を率いてやってくることを報告し、アプジュルトゥスを人質にして船に乗り込む提案をする。そして実際にアイエテスが武装した兵士たちを従えて登場する。

アイエテスは、捕縛された息子を取り返すために攻撃を仕掛けようとするが、人質になった息子の命を慮って敢えて手出しができない。そこでアプジュルトゥスは、覚悟を決め、「捕えられて死ぬよりも、むしろ自由に死にたいもの」と言い、「死ぬまで自由だ！死んで復讐してやる！」と叫んで、岩礁から身を躍らせて海に飛び込む(A303)。

ここでのメデアの弟アプジュルトゥスの死の経緯は、ギリシャの伝承とは全く異なっている。ギリシャ伝説では、羊毛皮を奪ったヤーゾンたちがメデアとともに船で逃亡するが、それを追走するコルクス船の方が快速で、あやうくヤーゾンたちは追いつかれそうになる。それを見たメデアは、一緒に連れてきた幼い弟アプジュルトゥスを殺して体を切り刻み、その肉片を海に放擲するという行動に出る。父親は大切な世継ぎである息子の死を悼み、その肉片を海から拾い上げている間に、ギリシャ人は逃走を果たしている。

グリルパルツァーは、自分の劇では、このメデアの残虐行為を抹消し、メデアは弟の死とは直接的には関係がないことを前面に打ち出している。アプジュルトゥスは、若いとはいえ、一人前の戦士として振舞い、ヤーゾンとの戦いで敗れて囚われの身となり、ついには自分のコルクス人としての尊厳を守るために、みずから死を選ぶのだ。ここには人間の自由の尊さと名誉のための死の高邁さが強調されているといえよう。

コルクス王アイエテスは、息子の死の復讐をしようとして「人殺しめ、死ね！」と叫んでヤーゾンたちに攻撃をしかける。しかしヤーゾンは、「人殺しはお前自身だ！」と言い、羊毛皮を突きつけて、「これを知っているか？そしてそれにこびりついている血も知っているか？それはフリュクススの血だ！——あそこにお前の息子の血がある！お前はフリュクススの殺害者で、お前の息子の殺害者だ！」と断言する。彼は、羊毛皮がそもそもの復讐の元凶で、ア

イエテスの不法な略奪が自分の息子の死をも招いたのだと示唆し、彼の責任を弾劾している。アイエテスはそこで絶望に駆られ、「大地よ、わしを呑み込んでくれ！墓よ、口を開けろ！」と叫んで地面にくず折れる(A304)。そしてこの嘆きの間にギリシャ人たちが船に乗り込むところで、この4幕物悲劇の『アルゴ号遠征隊』は幕を閉じる。

4. 『アルゴ号遠征隊』の諸問題

この戯曲は、ギリシャ人ヤーズンが、コルキスで略奪された金羊毛皮を奪還する事件を扱っているが、それと並行して、ヤーズンとコルキスの女魔術師メデアとの恋愛の経緯が展開されている。そしてこの作品では、このふたつの軸に絡んで、多様な問題が織り込まれている。以下、これらの問題に焦点を当てて論述してみたい。

(1) 父親と娘の問題

父親アイエテスは、コルキスの王でその支配者である。彼は自分の権力を自認し、所有欲が強く、異国人の財産をすべてを我が物にしたいと望み、またそのためには手段を選ばない。ギリシャ人フリュクススを殺害して金羊毛皮を奪ったのがその証拠である。彼は国の支配者として、また父親として、娘のメデアには全面的な従順と奉仕を要求する。

しかし娘のメデアは、自分の意志を重んじ、自由な個人として行動することをその生の指針としている。彼女が自分の意志を抑圧するのは、父親の命令が彼女の自尊心を損なわない限りにおいてである。ところが父親が、金羊毛皮に目が眩んでフリュクスス殺害という暴挙に出ると、メデアは復讐の女神たちの幻覚に襲われて、父親から離反する。彼女が劇の初めで人里離れた塔に孤独に閉じこもっているのは、彼女が女性としての自立心と尊厳を守り通そうとしているからだ。だが彼女は、ギリシャ人到来の報を聞き知り、父親の命を助けるために、そして自分が生まれ育った故国の危機を防ぐために、また父親の支配下に戻る。しかし彼女がギリシャ人のヤーズンと出会って女性としての愛に目

覚めると、再びこの父親と娘の關係に亀裂が入り、メデアは父親と恋人との間に心を引き裂かれ、苦痛と自己分裂に悩むに至る。だが父親は、あくまでメデアを娘として接し、彼女の愛の真実に眼を向けようとはせず、逆にそれを父親たる自分への背信行為であり裏切りであるといつて非難の矛先を向ける。ここには、娘であったメデアが、愛によって未知の自分を知って女性に目覚め、それによってそれまで堅固で不変とみなされていた血縁的な父娘關係が脆く崩れ去る様が描かれているといえよう。だがこの決裂の背景には、父娘關係を越えて、父権制と母権制との対立が潜んでいる。メデアが自己の尊嚴を主張しうるのは、歴代の母親から受け継いだ魔術の傳統を体得しているからであり、これには男である父親も関与することはできない。異なる傳統世界に根ざしているこの父娘關係の崩壊は、必然的な帰結とも言えるだろう。

父親が最後にメデアの運命に関して宣告する追放と呪詛の言葉は、離反した娘への憤激からなされているが、奇しくもそれが第3部の『メデア』で実現される。この戯曲が運命悲劇と呼ばれている由縁である。

(2) 個人の自由と社会国家との關係

メデアの場合、個人の自由と対峙する社会あるいは国家は父親に集約されているが、ヤーゾンの場合は、自分の意志と国家社会が要請する義務は一致している。彼は、ギリシャのイオルコス王である叔父の希望によって羊毛皮を奪回する航海に出るが、これはまた彼の勇者としての資質を証明する冒険の旅であり、羊毛皮を取り返すことは彼の社会的名声を高める名譽的行為でもある。彼は、この名譽を獲得することによってのみ、国家社会における個人の存在基盤を確固としたものにできると信じている。彼は国家との合一を望んでいる。そして敵であるコルキス王がこの合一を体現しているのは皮肉なことである。

これが男性の生き方とすれば、女性原理に根ざして自然の感情に従うメデアは必然的に、この国家社会と衝突し、存在の分裂に悩み、そこから疎外されるしかない。

(3) ギリシャとコルキスという異文化の衝突

この『アルゴ号遠征隊』という戯曲は、ギリシャ人が異国コルキスに上陸

したところから始まっている。そして作品の随所にこのふたつの国の異質性が強調され、その異なる風土や慣習および文化が、登場人物の性格や行動そして意志に大きな影響を与えている。

まずヤーゾンは、到着直後のコルクスの状況を述べて、「ここには食料も爽やかな飲物もなく」「道を教えてくれる案内人もいず、穀倉の蓄えを提供してくれる農夫もいなければ、牧草で養われた家畜もない」と嘆く(A241)。彼にとってのコルクスは、農業や牧畜の文化的営為がまったくない野蛮な荒蕪の地なのである。友人のミロも、「この国の湿った煙霧の中」では、剣を取って戦う勇気さえ萎えてしまい、「絶え間ない波の怒涛」と「吹きすさぶ風の音」しか聞こえず、「回りには人影はなく、小屋も、足跡もない」と言う。そして「ここで見えるのは亡霊ばかりで、枯れた樹木はすべて巨人に、光はすべて鬼火に見える」と評し、そのせいで人間の感覚が混乱し分別を失ってしまうと慨嘆する。まさに「神から見捨てられた国」である(A242)。ヤーゾンはまた、メデアと塔で初めて会ったとき、彼女の神々への祈願の異教性と魔法の姿に恐れを感じて切りつけるが、彼女を女性と認めて介抱しているときに、「おそらくお前は、見かけほど邪悪ではないのだろう、ただこの国の野蛮さが伝染したのだ」と言って、すでにコルクスに「野蛮」の烙印を押している(A247)。だからギリシャとコルクスは「文明国」対「野蛮国」という対比で捉えられている。そしてJ. ミュラーは、グリルパルツァーは、ギリシャ人には主に「均整のとれたヤンプス（弱強格）」で話させ、コルクス人には大抵は「自由韻律詩」で話させていることを指摘し、言語上からもこの対比が強調されていると述べている¹¹⁾。

ヤーゾンがこの「文明」対「野蛮」という対比を明確にしているのが、第3幕のメデアに対して自分の思いのたけを告白する長広舌においてである。

ヤーゾンは、「僕はギリシャ人で、あなたは野蛮人の血を持っている」と言い、「僕は自由で開けっぴろげ、あなたは魔術のまやかしに満ちている」と告げる。ヤーゾンにとってギリシャ人は自由で率直、コルクス人はその人間としての自由を知らず、未開の闇の力に拘束された無知蒙昧の徒でしかないと断

定している。そしてヤーゾンは、さらにはコルクスへの嫌悪感を表明し、ギリシャの優位性を賛美する。

僕はこの国がどんなに憎いか。その粗野な息は／いかに美しい天上の花すら干乾びさせるのだ、／以前は自然の庭に咲いていたのに。／あなたがギリシャに来れば、そこでは生命は／明るい陽光の輝きを浴びて楽しく戯れ、／眼はすべて空のように微笑み、／すべての言葉は友の挨拶、眼差しは／真の感情の真の使者、／偽りや策略に対する以外の憎しみはない。(A280)

ヤーゾンは、メデアをギリシャに連れて行くことが、彼女を野蛮で蒙昧な闇の世界から盲目の眼を開かせ、光の世界へ救い出すことであると信じている。

しかしメデアにとっては、自分が生まれ育ったこのコルクスこそ、自分に自由と自然な生活感情を保証してくれる土地なのだ。メデアは、第1部『賓客』の最初は、狩猟を好み、王女としての恵まれた特権を享受して自分の意志と感情のままに生きている女性であった。ただ、父親の願望と命令にのみ自分の意志を制御していたに過ぎない。彼女は純粋な自然児であったともいえよう。フリュクスス事件後に塔にひとり隠棲したのも自分の自由意志を貫徹したためである。しかしヤーゾンの出現によって、彼女は自分の中に隠されていた無意識の愛というものを刺激され喚起されて、その異質の女性としての感情に捉われて今までの自分を喪失することになる。ここには、ギリシャという異質性がコルクスに及ぼす影響の重要性が窺い知れる。彼女は自己の分裂に悩み、自分のアイデンティティを混乱させられる。しかし彼女は、ヤーゾンへの愛の宣言後にあっても、コルクスへの愛を捨てることはできない。メデアは、怒れる父親に向かって、「異国人の領袖であるあの人に、ここに残るように言って」と唐突とも思える提案をする。彼女は、「あの人を受け入れ、迎え入れて下さい！あなたのおそばであの人にコルクスを治めさせて下さい、あなたの親しい人、あなたの息子ですもの！」と訴える(A284)。ここにはメデアが、コルクスにいて初めて自分の幸福を得、ヤーゾンとの和解も可能になり、自分の本

来の生をまっとうできる希望が表明されている。彼女はコルクスという自分の存在の根底が大切なことを自覚しているのだ。しかし父親はそれを拒むどころか、かの不吉な呪詛を投げかけて不幸のどん底に落としこみ、ヤーゾンは結婚の契りとメデアの愛情を頼みにして彼女をギリシャに連れ帰るのである。

(4) 金羊毛皮の意味

グリルパルツァーは、「メデア伝説」を基調とする3部作戯曲を構想するにあたって、そのタイトルを「金羊毛皮」にしている。エウリピデスのように「メデア」ではない。彼はこの羊毛皮に関しては、「ニーベルンゲンの宝」のようなものとして捉え、それを「不正な宝の具体的な印」あるいは「象徴」とみなし、それにまつわる「メデアの性格と、彼女が近代的な見解からすれば嫌悪すべき破局へと導かれてゆくさまがおもしろかった」と述べている¹²⁾。ここでは、本論が扱っている第2部の『アルゴー号遠征隊』に限定して、この金羊毛皮がどのような位置づけをされていて、どんな意味を担っているかを考察してみたい。

この金羊毛皮は、ギリシャ人ヤーゾンがコルクス王からの奪還を目指す貴重な対象となっている。この品はコルクス王がフリュクススというギリシャ人から奪ったものであり、彼はそれを財宝とみなしている。だから物質的価値の最高のものと見られている。だがヤーゾンにとっては、それ以上に、ギリシャに由来するものであってギリシャの存立の基盤でもある。それを奪われたことはギリシャの汚辱でもある。なぜならそれはギリシャの「栄光と至福」(A262)の象徴だからである。さらには、ヤーゾン個人にとっては、それを奪還してギリシャに持ち帰ることは、彼の勇者としての存在を証明するものであり、またギリシャ世界を救うという行為によって社会的な名誉をかちとる手段でもある。そしてまた、羊毛皮を獲得することは、それに関連して生じるコルクス人との戦闘によって、ギリシャ人フリュクススの不名誉な死に対する復讐を成就させることでもある。ギリシャ人にとっては、この復讐は、神々の掟であった「賓客」の慣例を修復することであり、神々の義に叶った正当な義務であり権利でもある。このように羊毛皮は、ギリシャ人にとっては名誉と神々の正義の

象徴として捉えられよう。

だが、コルクス王からすれば、単に物質的価値のみならず、ギリシャ人が自分の国を略奪に来たから、それに対抗して撤退させる際の当然の戦利品でもある。ギリシャ人の不法行為に対する補償の品であって、当然それはコルクスに帰属するものと信じている。いわばコルクスが存立していることを証明する具体的な証しでもある。羊毛皮は、コルクスの勝利と守護の象徴である。だからこそ、それを奪われることを極度に恐れ、地下の秘密の洞窟に秘蔵し、恐ろしい大蛇に監視させているのである。

ここにこの羊毛皮を巡っての、ギリシャ人とコルクス人との悲惨な奪い合いが展開されるのである。だからまた、この羊毛皮は、両国間の争いの象徴とみなすこともできる。

しかしメデアにとってはどうか。メデアにとっては、羊毛皮は父親の犯罪によって取得されたものであり、復讐の女神たちの幻覚に襲われたように、不幸と災禍の元凶である。彼女は、それに言及すること自体が恐怖を呼び起こすのである。それは、王である父親の極悪非道の犯罪を体現し、殺害されたフリュクススの血に塗れた嫌悪すべき品なのである。羊毛皮は、それを所有する者にとっては血と復讐の象徴になっているのだ。

このように、羊毛皮には、それぞれの登場人物によって意味するところが異なっており、様々な象徴を合わせ持っている。しかしこの金羊毛皮の意味を一層深く吟味するには、3部作戯曲全体を視野に入れる必要があるだろう。

5. メデアとヤーゾンとの恋愛関係

『アルゴ号遠征隊』では、メデアとヤーゾンとの恋愛関係が重要な柱となっている。本論の最後にこの恋愛関係の経緯を跡づけ、この戯曲の悲劇性を明らかにしてみたい。

(1) メデアの愛

メデアとヤーゾンが初めて出会うのは、第1幕の塔の中である。彼女は、父

親の懇請によって神々への儀式を執り行っていると突如ヤーンズに襲われて傷を負う。ヤーンズは、異様な装いで異教の儀式を司っていた相手が女性だと知り、意外の感に打たれる。そして魔女でありながら優美な姿をしているメデアの2重性に魅了される。ヤーンズにとって、ギリシャを破滅させようとして魔術的力を行使する悪の権化でありながら、傷ついて怯えている女性らしい弱さを見せているこのメデアの姿は、謎的性格を印象付ける。ヤーンズは、この女性の本性を知りたく思って彼女に言葉を話すように仕向けるが、彼女は終始沈黙している。彼はこの無言の美しい女性に心を奪われ、思わずキスをする。そこにコルクス兵たちが雪崩れ込んでくるが、メデアは弟のアプジュルトゥスのヤーンズ攻撃を制止する。彼女は、このことによって殺人という行為を嫌悪し、民族を超越した普遍的「人間性」¹³⁾を体得していることを示している。この彼女の生命を尊び戦いを忌避する人間性こそ、3部作戯曲を貫く重要なメデアの特質であり、また、この戯曲における悲劇性を潜ませている。なぜならこの彼女の人間性は、ギリシャ人及びコルクス人双方にとって、自分たちの目的と願望を阻害する障害物になるからだ。そして敵に襲撃されたヤーンズは、メデアに再会を約束して塔から逃走する。

第2幕においてメデアは、昨夜のヤーンズとの出会いを回想する。彼女は、元は怒りっぽい気性であったが、今は穏和な態度を示す。これによってメデアが昨夜の出来事から強い印象を受けたことが看取できる。そして乳母のゴーラに向かって、あれは「神」であった、「死の神ハイムダー」であったと告げる(A252f)。彼女は、ヤーンズとの出会いを現実とは認めようとせず、夢に現われた幻覚として片付けようとする。ゴーラは、「ここに侵入したのは人間だったのです、高慢で厚かましい男だったのです」(A253)と主張して、あの出来事が現実であったことを訴える。するとメデアは癩癩を起こしてゴーラに沈黙を命じる。しかしメデアは、決して自分でそれが幻覚であったことを信じているのではない。彼女は、自分の心の琴線に触れるような衝撃的体験を自覚しているのだが、それを意識としては認めたくないのだ。一度限りの幻想にしておきたいのだ。なぜなら、この新しい感情は、今まで未知のものとして心の奥に

隠されていたのであり、それが激しい情熱として彼女を圧倒し、彼女の中の女性の愛を突きつけたからである。そしてこの情熱は、メデアにとっては、「恥辱」であり、神々の「嘲笑」の対象である(A255)。だから彼女は、この感情を抑圧し、それを非現実のものとみなして抹殺したいのである。だがこの新しい情熱は、その彼女の意図にもかかわらず顔色に現われ、また彼女自身もそれをはっきり知覚している。彼女は、父親の詰問に対して、「何が本当で何がそうでないかは聞かないで！わたしの頬の赤らみでお分かりでしょう」(A255)と答えているからだ。そしてこの新しい感情は、彼女にとって、今までのメデアの死を意味する。この愛の情熱に捉えられたメデアは、もはや以前の純粹無垢な娘にはもどれない。彼女は自分の女性性を知ったのだ。だからこそ彼女はヤーゾンに「死の神ハイムダー」に譬えたのである。

メデアが2度目にヤーゾンと出会うのは、父親の要請によって魔法の秘薬を持って来たときである。父親がその秘薬の入った盃をヤーゾンに渡そうとすると、それを拒否するヤーゾンの声を聞いて彼と悟る。そしてヤーゾンが、それを持って来たのが自分を一度助けてくれた女性だと認め、彼女を信用して飲もうとするとき、メデアは「やめて！」「飲めば破滅よ！」と叫ぶ(A265)。この叫びには、すでに愛の対象となっていたヤーゾンへの思いやりと、彼を失いたくない強い願望が反映されている。彼女は、彼のために思わず父親の命令に逆らった行動を取るのである。その後すぐにメデアは逃走するが、第3幕での「王の天幕」でのメデアの振舞いは暗示的である。

第3幕では、彼女は天幕に身を隠してヤーゾンには姿を見せない。ヤーゾンは外からメデアに声をかけ、メデアにどうしても会おうとする。メデアはその間終始黙っているが、ヤーゾンの「僕が呼んでいるんだ！愛しているんだ、メデア！」という言葉を受けて、思わず「手で眼をおおう」仕草をする(A268)。これを見た乳母のゴーラは、ここではっきりとメデアが恋をしていることを確信する。メデアはヤーゾンとの出会いにおいてはほとんど言葉を発していないが、その都度のこうした態度や身振りで自分の内心の動きを表現している。イエレナシュヴィリは、このメデアの「非言語的表現法」に着目している¹⁴⁾。

しかしその外でのヤーゾンと父親アイエテスとの小競り合いが始まると、メデアは意外にも、コルクス兵たちに武器をとって父親の加担をし、ギリシャ人たちが討伐の命を下し、父親のコルクス王に次のように督促する。

もう和睦とか、協議とか／友好協定の無益な試みは何の役にもたたないわ。／兵士たちを武装させ、部下たちを集め、／今こそ彼らを、異国人たちを攻撃することよ、／彼らが感づき、隊伍を固める前に。／彼らを追い払い、あなたの国から駆逐し、／命は救ってもその快速船を奪うんです、／さもなければ彼ら全員を殺すんです——全員を！（A269）

この攻撃提案は、それまでの控えめで自分を抑えていたメデアからすると意外で唐突である感は否めない。当の父親ですら「わしを騙そうと思っているのか、うそつきめ！」と言って、驚くと同時にその真意を判じかね、逆にメデアの狡猾な策略から出た言葉ではないかと疑う。メデアの突然の憤怒の爆発は、ある意味ではメデア固有の性格に基づくともいえようが、実はこれはメデア自身の心理的葛藤の現われである。メデアは、ギリシャ人への敵意と討伐意志を表明しているが、これは、メデア自身が愛を感じているヤーゾンを自分の心から追い出そうとしているからであり、自分の恋愛感情を抑圧し、抹殺しようとする激しい願望が転化された言葉なのだ。そしてこの後すぐに、自分は塔に隠遁して祈りの生活に戻り、できれば父親の老後を看取りながら、静かで落ち着いた余生を過ごしたいと洩らすのは、この恋愛感情抑圧と符合しよう。そして今まで寡黙であったメデアは、初めて長い告白をし、自分がこれまで秘めていたこの感情の真実を吐露するのである。

彼女は自分の恋愛感情を、「自分」のみならず「神々」にも「隠していた」と白状する。そして自分の「頬を染めているもの」を曖昧にしておくことはもはやできないという。そして彼女は、これを一種の運命と観じて、それに従うしかないという。

人間の本性の中には何かがあり、／それが、本人の意志とは関係なく、／盲目の力で引きつけたりはねつけたりするのは、／稲妻が金属に、磁石が鉄に引き付けられるように／人間から人間に、胸から胸に／ある引力が、秘密の引力が生じるのです。／その魔法の糸を結んだり解いたりするのは／魅力でも、優美でも、美德でも、正義でもなく、／情愛の魔の架け橋は眼に見えず、それに足を踏み入れた者さえ見たことはないのです！／あなたがお好きになるものは好きになるしかないのです、／それほどその強制力は、粗野な自然の力は強いのです。しかもあなたはその情愛を呼び寄せることはできず、／その情愛に従うことしかできないんです。(A270f)

メデアは、この愛の力のデモーニッシュな強大さを認識し、人間の抵抗の無力さを自覚している。勿論彼女は、愛によって「願望の明るい国」が開け、喜びの楽園が待っていることも予感しているが、彼女は敢えてそれを望みはしないと表明し、断固としてそれを忌避する。なぜなら、「あの人を見れば感覚が動転し、鈍い不安が頭や胸に入り込み、もはや私は私でなくなるのです」と告白することによって(A271)、愛というものは実は、自己のアイデンティティ喪失の危険を孕んだものであり、自己疎外という存在の分裂をもたらすものであることを感知しているからだ。彼女の愛の葛藤の根底にあるのは、存在基盤の崩壊と自己喪失への恐れである。そして愛の情熱と自己保存の願望との相克が、メデアの苦悩を特徴づけている。

メデアは、この場面ではまだ自分を救う可能性があったといえるかもしれないが、愛の運命はそれを許しはしない。金羊毛皮が保管されている洞窟に急いでいる途中で、またもやヤーゾンと出会うからである。メデアは渾身の力を奮い立たせてヤーゾンに抵抗するが、ヤーゾンに捕まって抱えあげられ、彼に翻弄され、敢えて自分の口から「わたしはあなたを愛している」という言葉を発するよう強要される。彼女がなおも無言でいると、ヤーゾンは彼女の愛を確かめる術はなく、彼女の愛を疑い、彼女を諦めて去ろうとする。そのとき父親のアイエテスがコルクス兵たちを連れて登場し、ヤーゾンに攻撃をしかけようと

する。メデアはこのとき初めて「お父様、あのひとを殺さないで！わたしはあの人を愛しているんです」(A283)と告白する。ここにおいてメデアの運命は決定されたのだ。彼女はもはやヤーゾンについていくしかない。そして彼に協力し、魔法の盃で大蛇を眠らせ、羊毛皮の奪還を成功させ、弟の死を悼みながらも、父親を見捨て、故国を去り、異国の地のギリシャに向かうのである。

(2) ヤーゾンの愛

メデアの愛は、彼女の心を震撼させ、その存在の根底を覆すほどの重大事件であったが、その当の相手であるヤーゾンの場合はどうであろうか。

ヤーゾンがメデアと初めて会った塔の場面では、彼はメデアを異教の魔女とみなし、攻撃を加える。しかし傷ついたメデアを看病しているとき、その美しさに感銘を受ける。ヤーゾンはメデアの「野蛮」と「優美」というギリシャ人にはない不可解で神秘的な2重性に魅了されるのだ。そしてこの2重性は、彼女が彼を破滅させようしながら彼を救助するという行為にも現われており、ヤーゾンはその救いの側面にのみ眼を向けて彼女を信用し、愛をかちえようとする。しかしヤーゾンのメデアに対する愛は、純粋な愛ではなく、官能的な情欲に動機づけられている。第2幕でコルクス王アイエテスが、ヤーゾンたちを饗宴に誘って、食事のみならず「女性」をも提供できると囁いたとき、ヤーゾンは即座に「塔」で出会ったメデアを想起しているからである¹⁵⁾。

ここでヤーゾンのメデアに対する行動のパターンに眼を向けてみたい。彼は、常にメデアより優位な立場に立とうとする。彼の優しさは、この上位にある者の意識から出た弱者への思いやりである。この優位性の意識は、彼がメデアに接する際の自分の希望の強引な押し付けに見て取れるが、この押し付けは暴力的ともいえる彼の行為からより一層明確になる。

彼はメデアとの初対面の際に、メデアの意思とは関係なくキスをしている。2度目の出会いのときは、秘薬の飲物を持って来たメデアのヴェールを強引に剥ぎ取り、彼女の手をつかんで無理に自分の方へ向けさせる。メデアが逃げ出すと、彼は後を追いかけて、彼女が身を隠した陣屋の幕を許可なく開こうとする。そしてメデアに出てくるよう懇願するが、この言葉は命令の調子を帯

びている。そして第3幕でメデアがひとりヤーゾンの元に残されると、彼は「あなたは僕の支配下にあるのです」と言って公然と彼女への支配権を主張し(A276)、彼女を腕に抱えて高く持ち上げ、彼女の従属性と無力性を思い知らさせている。その後また彼女が立ち去ろうとすると、ここにいるよう歴然と命令し、暴力的に腕をつかんで引き止める。ヤーゾンは、メデアに対して「わたしはあなたを愛しています」と彼女の口から無理矢理言わせようとするが、これもヤーゾンが彼女の「主人」であることを認めさせたいからであり、彼女をギリシャの文明世界に引き入れて教育を授ける愛の「教師」の役割を演じたいからである。このメデアに対するヤーゾンの態度は、自分が文明世界の人間であり、メデアは野蛮、そして自分が男性であり、彼女が女性であるという文化差別、男女差別の観念から由来している。

ヤーゾンが本心から彼女を愛しているかどうかは、ミロに対する告白からその真実が明らかになる。ミロは、「それじゃ君は本当に彼女を愛しているのかい?」と聞かすが、それに答えてヤーゾンは、メデアへの強い関心の理由を幾つか挙げている。ひとつは彼女が二度命を救ってくれたことへの「感謝」である。そして「美しさ」、「黒い眼をしたすばらしい女性」であること。彼は、感謝の念が大きな要素であることを自覚しているが、それ以上に彼女が女性で、しかも「美しい」ことが最たる原因であると白状する。彼は、メデアの心の内面の葛藤には全く興味を示していない。彼は、彼女の存在よりも、金羊毛皮そのものの奪還を至上命令にしているのだ。彼は自己の目的を達成することしか念頭になく、その意味では極めて「利己的」な存在である¹⁶⁾。このことは、ヤーゾンがメデアを抱えあげてその自由を奪い、彼女が「ヤーゾン! 放して!」と叫んで自分を降ろしてくれるよう頼んだとき、彼は「それじゃ僕の名前を言ったんだね、初めてだ! おお快い響きよ! <ヤーゾン!> この名はなんて美しいんだ」とひとり悦に入っていることから判別できる。さらにはヤーゾンは、メデアに「わたしはあなたを愛しています」と執拗に言わせようとするが、自分が彼女を愛しているとはここでは言わない。あくまで彼女にだけその言葉を強要している。彼は、彼女から愛されることが快いのであって、自分が

愛することではない。彼は、利己的なナルシストである。

ただ一度だけ、ヤーゾンは苦しい胸のうちの真情を吐露している。その告白がメディアに決定的な作用を及ぼしたのは疑いを入れない。

僕があなたの前に立ってあなたを見ていると、／ほとんど不思議な感情が僕を襲ってくる。／生の限界を越え／見知らぬ星にいて、／そこではすべての存在と行為の法則は違っており、／起こるものは原因も結果もなく／あるがままになっている。／荒れた海を渡り／……／戦いや争いに遭遇して僕はここに到着した、／そしてあなたと会いあなたと知り合った。／この異国の地は僕にはほとんど故国のように思える、／……／そしてまた、この異国を知ったら／既知のものが僕には未知のものになっている。／僕自身が僕には対象物となり、／別な人間が僕の中で考え、別の者が行動している。／しばしば僕は自分の言葉に思いを馳せるが、／それが意味しているのは第三者の言葉のよう、／そして行動となると、自分で思うに、／彼がすることしないことが、僕を驚かせるのだ。／ (A278)

ヤーゾンのこの告白は、メディアが悩み苦しんでいるのと同じ自己疎外、自己喪失を暗示している。しかもこの自己喪失は、メディアとの出会いによって生まれている。このヤーゾンの苦悩とアイデンティティ喪失の危機的状況が、彼女の琴線に触れ、彼女の心の深奥に巣食っていた感情と思想とに共鳴したのは明らかである。彼女はこのときにヤーゾンを愛する自分を受け入れたのだ。少なくともその契機にはなったと言えよう。

だが、ヤーゾンにとっては、この告白は気の迷いでしかない。彼本来の目的を忘却していたがゆえの迷妄・錯誤であって、彼は自分の覚醒した意識に戻ると、メディアの愛を目的に対する手段として利用する。そして彼女の魔術的薬によって大蛇を眠らせ、念願の金羊毛皮を手に入れる。しかしこの目的を達成すると、彼のメディアへの愛は変質する。

ヤーゾンが金羊毛皮を奪還して帰路につこうとしていると、メディアは、乳母

のゴーラも捕らわれて船上にいることを知ってすぐに彼女に会いたがる。するとヤーゾンは、無情にも「荒々しく」「ここにいるんだ!」と命令する。そのときのメデアの反応は、「メデアは驚いて両手を胸と額に当てながら立ち止まる」となっているが、これはイエレナシュヴィリによれば、彼女の「幻滅」¹⁷⁾の仕草である。しかし彼女はこのヤーゾンの冷酷無情の態度をまだ十分認識していない。彼女が、自分に対するヤーゾンの真の姿を体験するのは、第3部の『メデア』においてである。

6. 総 括

本論は、グリルバルツァーの3部作戯曲『金羊毛皮』の第2部である『アルゴ号遠征隊』の解釈を試みた。特に重要なテーマとして、「父親と娘の問題」、「個人の自由と社会国家との関係」、「ギリシャとコルキスという異文化の衝突」、「金羊毛皮の意味」、そして「メデアとヤーゾンとの恋愛関係」に論及した。これらのテーマは、個別に設定されているのではなく、それぞれが密接に絡み合っただけでなく、その相互の錯綜した糸によってこの劇というものが織り成されている。この多彩で複雑な織物の3部作戯曲全体を俯瞰的に鑑賞するのが観劇の醍醐味であろう。拙論は、第2部しか論じなかったが、この全体像に踏み入る道程の中間地点としてはそれなりの意義はあろう。

しかしこの第2部の『アルゴ号遠征隊』という戯曲は、それ自体独立した作品としても構成されており、十分鑑賞に値する筋と場面設定及び様々なテーマを内包している。特に父と娘、味方と敵の文化的背景、それによる文化的摩擦、恋する男と女の感じ方考え方の相違と齟齬などから、人間の性格や運命の問題が生き生きと呈示されている。そしてまた、社会における人間の自由の問題、そして自己疎外やアイデンティティの問題等、現代においても切実となっている問題を内包している。グリルバルツァーの今日的意義はここに根拠があろう。

注

- 1) 『グリルパルツァー自伝』、佐藤自郎訳、名古屋大学出版会、1991年、100頁
- 2) 第1部の『賓客』については、拙論「古代ギリシャの〈メデア伝説〉の継承と改変——エウリピデスとグリルパルツァーの戯曲に関連して——」（平成20・21年度愛媛大学法文学部人文系学部長裁量経費研究成果報告書『文化伝統の継承に関する総合的研究——衝突と創生——』文化伝統の継承に関する総合的研究プロジェクト 研究代表吉田正広 2010年 34-45頁）を参照されたい。
- 3) この作品成立に関しては、次の文献を参考にした。
『グリルパルツァー自伝』、前掲書
Franz Grillparzer: Dramen 1817-1828, hrsg. v. Helmut Bachmaier, Deutscher Klassiker Verlag, 1986
Joachim Müller: Franz Grillparzer, J.B.Metzlersche Verlagsbuchhandlung, 1963
- 4) Kommentar in: Franz Grillparzer Dramen 1817-1828, a.a.O., S767
- 5) 『グリルパルツァー自伝』、前掲書、103頁
- 6) Kommentar, a.a.O., S767
- 7) Kommentar, ebd., S768
- 8) Kommentar, ebd., S768f.
- 9) J.Müller, a.a.O., S32f.
- 10) Franz Grillparzer: Dramen 1817-1828, a.a.O., S231 なお以下引用した『アルゴ号遠征隊』の頁は、本論の中で「(A231)」と記載している。
- 11) J.Müller, a.a.O., S36f.
- 12) 『グリルパルツァー自伝』、前掲書、100頁
- 13) Tamara Jerenashvili: Mörderin aus Leidenschaft, Wissenschaftlicher Verlag, 2007, S58
- 14) T. Jerenashvili, ebd., S79ff.
- 15) Vgl. T. Jerenashvili, ebd., S64: 「この愛は、真正の深い愛ではなく、情欲と強い官能性に照応している。」
- 16) T. Jerenashvili, ebd., S69
- 17) T. Jerenashvili, ebd., S81